

書評

[評者]

佐々木淳

医療法人社団悠翔会理事長



医療職のための 症状聞き方ガイド

“すぐに対応すべき患者”の見極め方

前野哲博 編

●B5 頁152 2019年4月

定価：本体2,500円＋税

[ISBN978-4-260-03695-5]医学書院刊

「どうしてすぐに連絡しないんだ！」

「どうしてこんなことで連絡してくるんだ！」

ケアの現場を混乱させる医師の捨てゼリフ、トップ2.

予期せぬ体調変化を起こしたその人を前に、コメディカルや介護専門職、そしてご家族は、主治医への遠慮と不安とのほざまで苦悩する。主治医はコールの条件を具体的に設定し、事前に指導しているのか？ というとは実はそういうわけでもない。その時々状況判断が必要という理由で「とりあえず連絡を」という漠然とした指示しか出していないことが多い。しかし、医師の「その時々状況判断」は、実は大部分がある種のプロトコールに基づいて行われている。そのプロトコール、すなわち臨床推論(診断のための医師の思考プロセス)を、チェックリストとフローでシンプルに可視化したのが、本書だ。

もちろん診断に至る全てのプロセスを定型化することはできない。しかし、「とりあえず経過を見ていてよいか」「急いで医師に相談すべきなのか」までの判断であれば、実は十分に汎用化が可能なのだ、ということ改めて気づかされた。そして本書は、医師以外の医療介護専門職が、最短距離で、かつ自信を持って状況判断ができるようさまざまな工夫が加えられている。

ピックアップされたのは、風邪症状や頭痛、腹痛、めまい、むくみなど、ケアの現場で判断に悩むことの多い19の症状。それぞれ病歴の聞き方やチェックすべきポイントが明確に記されている。転倒・服薬ミス・皮膚症状など、個別の状況判断がより強く求められるものを除けば、この19症状で現場の悩みは95%以上カバーされるのではないだろうか。

特に秀逸だと思ったのが「緊急度判断チェックリスト」。見逃してはいけない危険サインのみならず、「これは安心！」という安全サインも網羅され、なぜそれが危険なのか、あるいは安全と判断できるのか、その

根拠もわかりやすく説明されている。さらに医療機関を受診しない場合の対応や、その時に患者さんに説明すべき内容まで網羅されている。

高齢者や認知症の人は、自分の症状をきちんと説明できないこともある。どのように患者さんから情報を引き出せばいいのか、そして、何をどのように医師に伝えればいいのか。この2つの点についても、豊富な実践事例とともに、具体的にアドバイスしてくれる。

本書は、「文句を言わずにいつでも相談に乗ってくれる医師がいつでもそばにいる」ような安心感を、ケアの現場にもたらししてくれるのではないだろうか。これからは医師に電話するときも、ドキドキする必要はもはやない。必要なタイミングでピンポイントに問題点を伝えてくれるあなたを、医師は有能なチームメンバーとして認識することになるはずだ。それは対等多職種連携を構築していくためのきっかけになるかもしれない。

前野哲博先生は、尊敬する大学の先輩であり、そして総合診療のパイオニアの一人だ。現場のニーズを知り尽くしたプライマリ・ケア医ならではの内容であると感じるとともに、本書の存在そのものが、ケアコミュニティに対する究極のプライマリ・ケアだと思った。また、研修医はもちろん、高齢者医療や在宅医療を通じてプライマリ・ケア全般に対応することが求められるようになった地域の開業医や勤務医にとっても、日々の診療の助けになるはずだ。

地域医療を担う医師の不足、そして多職種連携の難しさが指摘されるなかで、本書が果たす役割は非常に大きい。介護事業所や薬局には必備の一冊だと思われ、介護家族にもお勧めできる。施設からの頻回のコールに悩まされている在宅医の先生方は、施設に一冊プレゼントして、症状アセスメントについて一緒に勉強会をしてみたいかがだろうか。